

## 朝治武・守安敏司編『水平社宣言の熱と光』 (解放出版社、2012年)

吉田文茂

2012年3月3日、全国水平社創立90周年に合わせるかのように、全国水平社創立大会で採択された宣言（以下、「水平社宣言」と略す）に関する著作が刊行された。本書は「水平社宣言」をさまざまな角度から分析・考察した5本の論考と本書のねらいについて記した「序」によって構成されている。

序 水平社宣言を問う意味	守安敏司
第一章 水平社宣言への道程	手島一雄
第二章 水平社宣言の歴史的意義	朝治 武
第三章 水平社宣言—受け継いだところ・伝えた魂	守安敏司
第四章 水平社宣言のインパクト	本郷浩二
第五章 海外からみた水平社宣言	駒井忠之

「です」「ます」調で書かれた本書は、多くの人がとに読まれることを期待した一般的な部落史の著作でありながら、内容としては水平運動史研究の最新の成果を盛り込んだ研究書としての性格を併せ持っており、そのことが本書の最大の特徴となっている。

今、なぜ「水平社宣言」をテーマとした著作を刊行するのかという点については、「水平社宣言」を読み解くことで、現在の混沌とする部落問題状況の解明や低迷する部落解放運動の今後のありかたへの示唆を与えることを強くうたっており、「水平社宣言」を学ぶことの今日的意味を意識しながら、各章の内容を見てみることにしよう。

「序」は、なぜ「水平社宣言」をとりあげた

のかを記しているが、部落解放という課題と連動して理解されてきた「水平社宣言」を、それを超えて「歴史認識や記憶に刻み込まれる永続的な重要な意味をもつもの」だとして、部落解放よりも「射程の長いもの」だとしている。これまで「水平社宣言」に言及した著作は数多いが、主題として取り上げた著作はあまりないとして、住井すゑ・福田雅子『水平社宣言を読む』（解放出版社、1989年）と宮橋國臣『水平社創立宣言と「エクスプレシオニズム」—アヴァンギャルド西光万吉の苦悩と遍歴—』（奈良県高等学校教育文化総合研究所、2006年）の二つを取り上げている。広く知られているのは『水平社宣言を読む』であろうが、同書が住井・福田両氏の対談形式で「水平社宣言」の内容そのものを文字どおり読み解いているのに対し、本書は「水平社宣言」の一文字一文字や語句の読み解きよりも、「思想としての水平社宣言」の歴史的解明に力を注いでいる。

本書のよって立つ基本的スタンスについては、「全水創立宣言を一つの歴史的文書もしくは歴史的史料として捉えて、歴史的アプローチをおこなう」こととし、「全水創立宣言に関する史料の深い検討を前提とした歴史研究を重視し、それを前提として歴史的意味を問う」ことを本書の目的としている。

「第一章」では、「水平社宣言」に特徴的な「人間尊重の精神」と「血縁的な一体感によって説かれる部落民意識」がどのように準備されてきたのかを解明するため、全国水平社創立に至る経緯について水平社以前の運動と水平社創立メ

ンバーの思想の二つに着目している。水平社以前の運動としてとりあげられたのは、1912年に設立された大和同志会と1914年設立の帝国公道会の二つであり、1919年と1921年の2回にわたって開催された同情融和大会における「宣言」との対比のなかで「水平社宣言」の思想的 content の特徴を見てとるべきだとした。「水平社宣言」にある部落民としての誇りについては、米騒動後の『紀伊毎日新聞』に掲載された「俺等は穢多だ」(なみ生)と題する有名な文章以前に、すでに『明治之光』のなかの三好伊平次らの文章にその萌芽が見られるとしている。また、1916年の博多毎日新聞社襲撃事件などをとりあげ、「部落大衆の怒りや主張をも前提に、水平社宣言は成立する」とまとめた。次に、全水創立メンバーの思想の分析に移り、西光万吉ら奈良柏原グループの「諦観や自卑をめぐる内在的な問い掛け」と平野小劔による「差別への怒りにもとづく自己規定」の二つを包含しえたところに「水平社宣言」の意義があるとしている。「おわりに」で、著者は水平社宣言の特徴を「同情融和批判から導かれた人間尊重の思想と、血縁的な一体感によって説かれる部落民の『誇り』意識、その融合」としたうえで、「多くの部落大衆が共感し得る一致点」でまとめた「水平社宣言」は「具体的な運動論を記さない」という「弱点」を有しながらも、「部落大衆の決起を促す」という観点で見れば、「最大限の強みを発揮した」のであり、そこに「水平社宣言」の意義があったとまとめた。

「第二章」では、全国水平社創立の意義を考えるためには、「水平社宣言」だけを見るのでは不十分として、「綱領」「則」「決議」と「水平社宣言」を一体のものとして見るべきことを強調し、最初に「綱領」と「決議」の分析をおこなっている。そのうえで、「水平社宣言」の作成者の考察に入り、「第一章」同様、起草者

としての西光万吉と添削者としての平野小劔という整理をおこなっている。次に、「水平社宣言」の思想的 core について「結集軸としての部落民意識」と「社会的正義としての人間主義」との二つに整理し、それぞれについて、平野と西光の思想がどのように反映されているのか、詳細な分析をおこない、「水平社宣言」が「部落差別の状況と歴史的 background を鋭く暴きだし、そのうえで部落民衆の歴史的役割を明確にしたことは、部落問題をめぐる歴史的認識の大きな革新をもたらした」との評価をおこなっている。続いて、水平運動のなかで「水平社宣言」がどのような歴史的運命を辿ったかの考察に入り、「水平社宣言」評価の変遷について整理した。そして、しめくくりとして「水平社宣言」作成に中心的な役割を果たした西光が、のちに「水平社宣言」を自ら否定した事実を「『宣言』と水平社の歴史にとって等閑視できない重要な一局面として記憶に留めておく」べきだとした。

「第三章」では、「水平社宣言に影響を与えた思想」と「水平社宣言が影響を与えた思想、運動」についての考察をおこなっている。「水平社宣言」に影響を与えた思想として紹介されているのは、マルクス、エンゲルス「共産党宣言」と大和同志会の思想、「民族自決原則」と日本の「人種差別撤廃案」提案、民族自決団「檄」、佐野学の「特殊部落民解放論」で、「水平社宣言」が影響を与えた思想としては、奈良県大福村中和少年少女水平社の宣言・決議、関西朝鮮人連盟本部の宣言・綱領・決議、衡平社主旨・社則、人間社の宣言・決議と全国融和聯盟創立趣旨・宣言・綱領・決議、関西沖繩県人会と解平社の結成、日本プロレタリア癩者解放同盟宣言草案がとりあげられている。「水平社宣言」がいかにさまざまな思想の影響を受けていたのか、またいかに多くの運動に影響を及ぼしたのかを網羅的に整理している。これまでも、衡平社や解

平社、日本プロレタリア癩者解放同盟などへの影響についてはつとに指摘されてきたところであるが、少年少女水平社や融和運動なども含め、広範囲にわたって影響を及ぼしていたことを明らかにしたことは本書の大きな意義である。

「第四章」は、副題に「全国水平社の創立はどのように受けとめられたか」とあるように、「水平社宣言」に限定せずに全国水平社が当時の社会にどのように受けとめられたのかを明らかにしている。まず、メディアに注目して創立大会の様子を報じた新聞報道の分析をおこない、ほとんどが速報にとどまったこと、その後も『大阪朝日新聞』や『三重新聞』などで運動への積極的な評価も見られるものの、基本的には「既存の秩序を脅かさない範囲でのみ承認する」ととどまったことを明らかにした。そして、『中外日報』を除き、「多くのメディアは水平社宣言や水平運動がもつ、既存の秩序や価値観を揺るがすほどのインパクトを非常に矮小に捉え」たため、水平運動の可能性を十分に伝えられなかったとした。

続いて、他の社会運動の側が水平運動をどう認識し、水平社との距離をどのように測っていたのかという問題意識で、指導者である山川均と佐野学の二人をとおして水平社への高い評価と期待を浮き彫りにしている。また、融和運動の側の水平運動観については、「水平社を敵視していた」平沼騏一郎と水平社の創立を賞賛しつつも方向性そのものについては懐疑的であった喜田貞吉を対比させ、喜田の見解を「融和運動の水平社に対する最も典型的な認識」とした。さらに、水平社や「水平社宣言」との出会いを経て、価値観の転換を経験した人物として有馬頼寧をあげ、「人間は尊敬すべきものだ」という水平社の主張に教えられ、様々な形で水平社への協力を打ち出していったとした。

次に、「被差別部落にとっての水平社宣言」

として、「水平社の創立」と「水平社宣言」が被差別部落の人びとにどのように受容されていたのかを、創立大会に参加した人びとの回想や官憲資料をもとに、「水平運動に賛同するか否かに関わらず被差別部落の人々の自らを卑下する心が薄らぎ、自尊心が高まった結果、差別撤廃に向けた意識が高まった」と結論づけた。「水平社宣言が突きつける理念の前に、それを肯定するか否かに関わらず、多くの人々が部落差別や部落問題をめぐる認識を揺さぶられ、何らかの形で自らの立ち位置を問い直すことを迫られてきた」ことに「水平社宣言」の最大のインパクトを読み取り、「水平社宣言は私たちの生き方を震撼させるほどの衝撃を秘めているからこそ、時代を超えて読み継がれ、常に熱と光をもたらし続けてきた」としめくくっている。

「第五章」では、全国水平社の創立の動きが海外でどう報道されたのか、また「水平社宣言」はどう翻訳されたのかという点の考察をおこなっている。また、『THE NATION』に掲載された「水平社宣言」の英訳を「冒頭の呼びかけ」「兄弟よ」「虐められてきた」「勤る」「人の世に熱あれ、人間に光あれ」のそれぞれの語句について、日本語の意味内容と合致するかどうかの分析もおこなっている。その英訳のなかで、この英訳だけは何とかしてほしかったと語っているのが、「人の世に熱あれ、人間に光あれ」の英訳が「Let there be heat and light!」となっている箇所である。「熱」を「heat」としたのは画竜点睛を欠くものに他ならず、「友好的で人を心地良くし、緊張を和らげるとともに人の心をくつろがせる『暖かさ』」の意味であるから、「warmth」以外に訳しようはないと残念がっている。

以上、各章ごとの紹介をおこなってきたが、最後に、本書の意義について一言述べるならば、多岐にわたる論点でさまざまな角度から考察を

おこなうことにより、「思想としての水平社宣言」の歴史的解明にはほぼ成功したことであろう。「水平社宣言」の600字あまりの本文中に盛り込まれた思想の分析はこれまでもなされてきたが、起草者としての西光万吉のみが脚光を浴びてきたのを添削者として平野小劔の果たした役割が正当に評価され、復権が実現したことの意味は大きいであろう。また、多様な思想の影響をうけて全水が創立したことはこれまでも明らかにされてはいるが、その点もより詳しく論じられており、さらに「水平社宣言」がさまざまな運動や団体、個人に影響を及ぼしていた点を簡潔に整理してあるのは、「水平社宣言」の歴史的意義を考えるうえで重要である。とりわけ、融和運動への影響や海外への影響も含め、「水平社宣言」の影響が広範囲に及んでいたことは改めて確認しておきたい。その意味で、個人的には第三章と四章が興味深かった。

本書は5人の研究者による論集というスタイルであることの、プラス面とマイナス面を包含している。それぞれの研究者の認識の差が言い回しの違いに表れている。たとえば、「水平社宣言」に盛り込まれた二つの思想について、第一章では「人間尊重の精神」と「血縁的な一体感によって説かれる部落民意識」と表現したのに対し、第二章では「結集軸としての部落民意識」と「社会的正義としての人間主義」と表現している。「部落民意識」はほぼ共通しているが、もう一つの思想について、「人間尊重の精神」と「人間主義」では微妙に違ってくるのではなかろうか。「部落民意識」と対比するのであれば、「人間主義」の方がより適切だと思われるのだが。

気になるのは、「序」で断ってはいるものの、重複する事例の多さと用語の不統一の件である。各章のテーマだけ見ても、重なりは予想されるので一定程度は仕方がないのであろうが、

引用文などでの重複に関しては一工夫ほしかったように思う。たとえば『水平』に掲載された、全水創立大会での駒井喜作の「水平社宣言」朗読の場面が第一章と第四章に登場する。また、「水平社宣言」との類似点の多さもあって民族自決団の「檄」が目されるためか、第一章は部分、第三章は全文を引用して解説が加えられており、どちらかは引用せずに論じてもよかったように思われる。ただ、見方を変えれば、引用の重複というのは、それだけ重要な意味合いを持つからこそともいえ、その点、駒井の「水平社宣言」の朗読場面や平野の果たした役割の大きさを見てとることができるのも確かである。

用語に関して、全国水平社の運動を見ていく場合、「水平社運動」と表現するのか、あるいは「水平運動」と表現するのかは、それぞれの執筆者の水平社の運動についての理解の違いに左右されると考えるのだが、なぜ「水平社運動」か、なぜ「水平運動」か、その違いはどこから来るのかを考えること自体、「水平社宣言」を歴史的に分析していくうえで不可欠と考えるので、掘り下げてほしかった。編者のひとりである朝治氏の考え方については、『水平社の原像』（解放出版社、2001年）の「序にかえて」のなかで、両者の違いについて論じられているが、他の執筆者がどちらの用語をどのような理由で使用するのか一言あると、水平社の運動の理解も深まるのでよかったのではなかろうか。また、全国水平社創立大会宣言の略称についても、本文中では「水平社宣言」とする執筆者と、「宣言」や「創立宣言」と表現する執筆者がいて、統一性が保たれていないことは、結果として「水平社宣言」の理解をかえって分かりづらくしているように思われる。各章・各節のタイトルについては一般的に使用されている「水平社宣言」に統一しているので、本文中も「水平社宣言」

に統一してもよかったのではなからうか。この点は、「水平運動」と「水平社運動」との違いとは異なり、統一が可能であったと思われるがどうであろうか。

以上、瑣末なことがらの指摘に終始してしまい、本書の核心の部分を中心に紹介できなかつたかもしれないが、本書のもつ意義の大きさが減じられるものではない。「水平社宣言」の成立までの経緯や盛り込まれた思想はもちろんのこと、「水平社宣言」が受けた影響と及ぼした影響、「水平社宣言」がどう伝えられ、どう受けとめられたのかなど、これほど多岐にわたって「水平社宣言」について論じられたことはな

かつた。その意味で、本書は「水平社宣言」について学んだり、考えたりする際の基本的な書物であることには間違いなく、今後「水平社宣言」について言及する場合は、本書で示されたことがらをどうふまえるのが問われることになるであろう。

最後に、「水平社宣言」に関心を持たれる方はもちろんのこと、水平社について少しでも学ぼうとされる方は、ぜひ本書を一読していただき、「水平社宣言」の今日的意味について考えるきっかけとしていただきたい。それはとりもなおさず、本書執筆者に共通する願いであると考えるからである。